

光明

第九卷第四號

深山のさくら
 深山がくれの櫻木は、
 はなれども春ごさに花
 は開くぞかし
 心のうち信あらば人のなから
 ぬハ、の小人は、獨り住むとも
 念佛はごなへらるべし、たしな
 みても念佛の稱へられず、佛恩を
 忘るゝは、信心なきがゆへなり

大眞 本 行發部本團明光

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和二年四月十五日發行(毎月一回十五日發行)

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和二年四月十五日發行(毎月一回十五日發行)

光 明 第九卷第四號

定價金拾錢

淋 し き 事 實

馬鹿と云われても仕方がない。
 私には見苦しい煩惱の心しかない
 淺薄だと云われても仕方がない。
 私にはこれだけしかないのです
 知つた哲學はほんどうの私ではない
 語つた理論もほんどうの私ではない
 拜まれても私は矢張り凡人である
 そしられても私は矢張り凡人である
 私は今西の空をながめつゝ、お念佛してゐる
 これが私の全部である。
 (聖光二卷四號より)

◆合掌宣言

- 第一、我は之れ久遠劫來の業苦に惱む。されど、傷き痛み惱める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。
- 第二、我はこれ曾無一善唯知作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生きたまふみ親。罪惡深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひたまふ。
- 第三、恵まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘しき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたまふ永遠の光明。聞ぜん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命。
- 第四、希くは自力小我の迷妄を破し、み光にはからばれて、無我報謝の歡喜に生きん。
- 第五、「四海の信心の人は皆兄弟。」其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰藉し、策勵して、相愛に生きん哉。

◆本領

毀譽褒貶に動するなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。
救はれたる者は立つて、全人類救済のために、熱き血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、濁亂の社會に猛進せよ。

◆てしに手を杯苦◆

あなたは今御立派な善人として世の中の賞賛の的である。
あなたは今お得意の際中です。何の暗さや寂しさがあらふ。しかし私どもはあなたからは嫌な氣持ちと冷さしか受けませぬ。苦しみ悩む寂しい人間はあなたからサヨナラをします。
私どもはあなたに用事はないのです。
あなたの笑いは堂々たるものであります。しかし私達は其笑いを見れば寂しいのです。私達は人間の苦しさをあまりに知りつくしました。底なき闇を知らされました。私はゆきませぬ

淋しい人の胸から胸に巡禮して……苦しい旅に疲れた人たちの涙から涙に巡禮して……
(聖光二卷三號より)

價値の生活 (二) 住岡狂風

人間は

安田某といふ大金持は金をためたが故に殺されました。しかし彼にはそれ以外に何物もなかつたでありませう。

日蓮尊者も亦佛法にあだをする外道たちのために殺されました。しかし尊者の上には死様の如何にかゝはらす大きなものがありました。

或村の人たちは話してゐました。

「前には随分悪くて、後には念佛に救はれた小田三郎君は死後一ケ年の今日もまだ三郎君の一言一行が残つて我等の教訓となり、刺戟となり、話題となつて生きてゐるけれど、さる男が川にはまつて自殺をどげ、其妻が夫のあとを追ふて刃物自殺をした。けれど我等には何ものも與へてはくれなつた。」と、
釋尊は名もなき貧女にも一燈を捧げた赤誠に對して、汝はやがて須彌燈光如來にな

り得るよと、貧女の今日の身の上に絶對の價値を盛りあげられました。

佛教はまことに、凡夫の上にも聖人の上にも愚者の上にも智者の上にも、絶對の價値を盛り得る教法であります。

人は單なる動物として存在するには堪へられませぬ。必ず生活の上になにか大きな價値と云ひますか、意味と云ひますか盛りあげ、見出さずには生きてゆくことは出来ませぬ。

信仰生活とは私たちの上に最高價値を得させて貰ふ生活であります。

假面

人間の久遠の自性は自分を飾りたいとすることでありませぬ。云ひかへると外に賢善の相を装ふことでもあります。賢い人であること善人であることが悪いものではありません。内如何を問はず外に賢い人らしく、善人らしく装はふとすることが悪いのであります。親鸞聖人には如何に「外に賢善精進の相を表はすことを得ざれ内に虚假をいだけばなり。」との善導大師の御云葉が骨髓をさしたか知れませぬ。誠に自分

の内の虚假不實を氣づかずして外に賢善の假面をかぶりたいとあせる凡夫の自性の根深いをおどろかすにはゐられませぬ。人は如何なる場合にもそうした偽善者であります。たゞ宗教聖壇上でだけは、これがゆるされませぬ。然るに迷ひ深き凡夫は如來のみ前にも猶かつ此の假面をおし通さうとするのであります泣いたのが信仰だと思つたり、よろこんだのが信心だと思つたり、様々な色彩を凡夫の自性の上にかぶらして信仰を確かに證據づけやうとするのは、知らずして如來をあざむき自分をいつはるものであります。外にむかつて自分を飾りたい凡夫がこの久遠の装ひや化粧をすてることは唯如來の智慧のみがよくなし能ふのであります。如何に美しく化粧しても化粧は化粧であつて眞實ではありませぬ。化粧たのは化粧たのであつて本物ではありませぬ。さめよと云へば、さめたと化粧やうとし、悪人だと云へば、悪人と化粧やうとし、助かると云へば、助かつたと化粧やうとするのであります。みんな遊戯であつて助かつたのでも救はれたのでもありません。たゞ頭だけもつて話を聞いたり、結果をはやくつかまふとしてあせるものは遂に眞眞の如來を知り得ないのであります。

泥 と 蓮

泥は如何ほど手を入れても泥であります。泥は泥であつて蓮ではありませぬ。泥を蓮にしやうとあせつておれば、それ無智であります。人間は久遠の泥である所の煩惱をこねあげて蓮にしやうとします。蓮は泥なくしては出来ませぬけれども、蓮は断じてぎろではありませぬ。ぎろを蓮にしやうとして苦しむのが多くの求道者たちであります。自分を化粧して知つて、覺えて、わかつて、よろこんで安心して、美しくなつてお浮土参りにならふとするのは泥が蓮にならふとするのであります。

悪人が悪人であることを知らず
愚者が愚者であることを知らず
凡夫が凡夫であることを知らず
病人が病人であることを知らず
善人である、賢人である、聖者である、健康者である、極樂参りであるとなりすま
しております。又ならふとしてゐます。どうしたら極樂まいりの身になれるか、よろ

こべるか、有難うなれるかといふことにばかり氣をくだいて化けやうくとしてゐるのであります。泥が蓮のまねをしてゐるのであります。

或所で熱心に求道なさる御同行にいくら御話を申してもわかりませぬ。毎日毎朝一席欠がさす講演を聞かされてもどうしても夜が明けませぬ。矢張りお浄土參りに化けやうとなさるのであります。その自力がどうしてもぬけませぬ。自力であるぞ知りつゝ、どうにかなりたい。他力がわからねば自力がすたらぬ。自力がすたらねば他力が知れない。此處に至ると極難信の法であります。飲まぬ酒に酔ふたり、食はない砂糖の甘い筈はありませぬ。

或朝私の寢床の側で泣き聲がします。まだ私が起きるには二時間も早い時であります。私は昨夜おそくまで起きてゐたので眼があきませぬ。

『ごろは何處までもごろです。』
と一口云つたきりで私は眠つてしまいました。目がさめて見ると其方はやつぱり泣いてゐます。

『コップにごろを一ぱい入れて來なさい。かきませても、ごろはごろです。静まつてもごろはごろです。ごろは永遠にごろです……』
又も私は眠つてしまひます。その方は深く考へてゐます。又私の目がさめますと其方が『わかりませぬ。』と云つて泣いてゐます。

『ごろが佛にならふともかくのではありませぬ。ごろはごろです。ごろが美しうならふとするのではありませぬ。』

煩惱の体、罪惡の心を如何にこねあげても佛にはならぬ。化けるのは大概にしておやめなさい。

信仰は酔ふのではありません。さめるのです。

善導大師は、ごろがごろとわかつて、罪惡生死の凡夫、無有出離之縁と信じられませんでした。

あなたのは倒事になつてゐます。

ごろはごろです……』

私は又深い疲れにひき入れられてしまひました。二時間ほどたつた頃、私はほんどに眼をさましてゐました。見れば其方は、お念佛しながら、よろこびにむせんで泣い

てゐます。全くのかはり方です。其方は申します。

『先生！ 有雜う。』

ちがつてゐました。間違つてゐました。私は御恩を知らずに、泥であるとは口だけで、やつぱりお淨土參りに變らふ、よろこんで行かふ、くつろいで行かふ、わかつてゆかふとしてゐました。

私は凡夫だつたのです。迷ひの衆生であつたのです。

わかりました。ごろだと知れました。

み佛様をあざむいて化やうくとしたおそろしい奴です。

あゝ私は凡夫だつたのです。地獄一定の悪人だつたのです。

それがあゝお他力は私のものであつたのです。

お念佛のみでありました。』

と泣いてよろこんでゐられます。化けやうくとする自力に気がついたのです。如來の智慧光は自力を打破つて人間のはからの間にあはぬことを知らしめます。

念佛は蓮であり、煩惱は泥であります。煩惱が蓮にかはらふとしないで泥ながら

の中に如來廻向の念佛白蓮華と咲きます。前夜に申しました通り、智慧の天地では價值のあるものがあるどわかり、價值のないものがないどわかります。

『煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもて、そらごたはごたまことあることなきに……………』

とは泥が泥としてわかつたのです、反價值が反價值としてわかつたのです。

『まことあることなきに念佛のみぞまことにておはします。』

とは價值が價值として領得されたのであります。

眞實を眞實をと、眞實をたづねて、いかれのどころへも、いづれの行へも、眞實だと腰がおろせなかつた。一切がそらごたであり、たはごたであつたのです。それが、究極的眞實は唯如來だけであつた。其如來こそ、ほんとうの生命で、力であり、それのみが生きた力として私たちの貪瞋煩惱の中へ働いて下さつてお念佛となつて下さつたのであります。

『妄念はもとより凡夫の地体なり……………』

妄念より外に別に心はなきなり……………』

臨終の時までは一向の妄念の凡夫にてあるべきぞ。……
妄念のうちより申しいだしたる念佛はにごりにしまぬ蓮のごとくにて往生決定うたがひあるべからず。……』

とは源信僧都のみ言葉であります。

凡夫を凡夫と知り、如来を如来と知らしめられるのは佛智の力であります。智慧のない生活とは、眞實のものと、眞實でないものとの見わけがつかないことであります。本来の無明が無明であることを知らず、罪惡生活を眞實生活と認めやうとする所に人間の無理なはからひと、我慢があります。み佛はこの我慢とねうちのないはからひを打破つて如来御自身の本願へと目覺めさせて下さるのであります。

隨喜と我執

一切衆生を久遠劫來、暗から暗に引きづりまはす力は、我執であり、執着であります。

俺が、わしが、と我を云張らねばおかぬ執着はごおそろしいものはありませぬ。

自分の分別に執着し、物質に執着し、善に執着するために、一切の功德を亡ぼすのであります。

佛や菩薩と、凡夫との差異は唯この執着があるかないかによつておこります。釋尊のやうに五尺の体をもつた佛を應化身の佛と申します。應化身の佛には、身土自在といふ功德があります。應化身の身土自在といふことは、かう云ふことであります。

佛には我執、執着がありませんから、一切諸佛、菩薩、一切衆生の善根功德に對して嫉妬の心をおこさず、これによるこんで隨喜せられるのであります。凡夫は他の善根功德にも我執の心から隨喜しないで嫉妬するのであります。隨喜するとは他の善根功德を成就するのを見て、自身に功德を成就したと同じよろこびを感じることであります。甲の善根功德に對して乙が隨喜する時は乙は甲と同じ功德の持主であると云ふのであります。釋尊は自体は一つでも他の一切善根功德に對して隨喜せられますから一如法界の諸佛菩薩の功德は御一人で持つてゐられるといふのであります。ですから經には隨喜の徳は量り知ることが出来ぬとあります。一人でもつて百千萬億無量の功德を成就するのが隨喜の徳であります。隨喜の徳のない者が如何によいことをしまし

てもそれは我執に汚れてゐますから、ちつとも眞實の善にはならぬのであります。釋尊の如きは一人でこの隨喜の徳に一切の善根功徳を御成就なせることが出来ますから身土自在といふのであります。凡夫は隨喜するかはりに他人の成功や向上や善根を見てもすぐ嫉みます。まことに釋尊と凡夫との差はこの隨喜功徳の徳があるかないかによつて出来るのであります云ひかへると我執があるかないかによつて定まるのであります。我執の無くなつたことを無我といふのであります。『佛法は無我にて候』とは蓮如上人の御言葉であります。

俺が、わしがど我がどれないのは、無智な高慢心があるからであります。高慢心はおのれを眞に知らぬ者の有する高あがりした心であります。自分を知らぬのであります。高慢心のある者には、如何なる尊いものも我がものとはなりません。我執や高慢心は無限の迷ひの暗をつくるものであつて、功徳はこゝに影をひそめてしまひます。しかし私たちは、この我執をとり得るかど申せば、私たちは悲しいことながらこの我執をとり得ないのであります。我執がどれぬ間、私たちは功徳を獲得することは出来ぬのであります。然らば私には我執のどれないまゝ迷より外ないのでありますか

光の源

親鸞聖人様は、三千大千世界の光の源功徳の根源をば、阿彌陀如來の大信海の中に見出されたのであります。

如來のみ心は、智恵と慈悲とであります

私たちは我執のどれぬまゝに如來の智恵光にふれねばなりません。如來の智恵光は凡夫の久遠の深間しい相を見せて下さるのであります。白粉もへにも間にあひませぬ。一切のかざりをつきやぶつて久遠の凡夫の相をお救ひ下さるのであります。化けの皮をひきやぶれて久遠の衆生の相を見せつけられた時、どうして高慢心が間にあひませう。我執が間にあひませう。

誠に如來の鋭い智恵光は私の我執の心をつきやぶつて知らず識らず、如來に隨喜させてしまふお方があるのであります。如來の智恵光の前に立つた時だけ私たちは救はれる罪惡生死の凡夫であり、大善識にも、所謂同行顔にもなれませぬ。謹んで合掌して如來を拜ますにはわられぬのであります。

私のほんとの相を知らせ下さるのも智恵のお光であり、我執を打破つて下さるのも

智恵光のお働きです。おれが我がといふ高慢心が如來の智恵光の前につきやぶられて自然に頭が下つた時、如來成就の南無阿彌陀佛は凡夫のもとなるのであります。まことに我執のつきやぶられた時こそ無我の仰信であります。無我の態度で隨喜された時に申し上した通り、願せず行せずして、願せずの願人、行せずの行人として功德の持主に轉するのであります。

如來は、如來のお力で、衆生に隨喜せしめて、如來の大生命である名號を衆生に廻向して下さるのであります。だからこそ他力といふのであります。

しかし凡夫は矢張り凡夫であり如來は如來であつて、私が如來となつたのではないのであります。凡夫がつい我を忘れて、ごろでなくなつた氣になりました時信仰も亦我執に變つてしまふのであります。

彼此金剛の信

我執とは自分自身を棄てることができることの出来ない心であります。自分を棄てないで、生きた信仰は得られないのであります。地獄一定であるとか罪惡生死の凡夫であるど

か、無有出離之縁とかの体験は惡を働くとか罪惡をゆるすとか云ふのではなくて、我執がどれとおちきつた相なのであります。裏をかへして云へば大きな功德や價值が体得されたのであります。

大きな價值が体得され、如來の大生命を得させて貰つたことを忘れて、罪惡生死だけがあるのであれば、宗教生活は人生に何の尊い交渉も持ちませぬ。それであるならば、より大きな悲觀を得られるのみであります。然し宗教は人間のたどりつくべき究極的な價值生活の展開であり、偽らざる最上の眞實生活であります。

久しい間我が他力教は、間違つた惡罵ばかり受けて來ました。『悪いことをしてもこのまゝ。』と平面的に云葉ばかりを捕へて、他力教とはするい教でもあるやうな、惡人の責任のがれや、人生逃避の云草を興へるのであるやうにとられたのは悲しいことであります。

惡人愚者凡夫の体感は決つて如來をおいてあるのではありませぬ。如來を生活する………如來の全部を戴くことより外に他力はありませぬ。如來の全生命を我が生命として下さる。それは人間の功利主義の世界の沙汰ではないのであります。

親鸞聖人が凡夫である。愚禿である。痛感なされたからとて、聖人が人並すぐれた愚者でもなければ凡夫でもありません。俺は賢い、俺は善人だと云フ。おるなり思つてゐれば、賢いのも善人であるのでもありません。日蓮上人が上行菩薩とは俺である。叫んだとて、聖人より凡夫と菩薩ほど違ふ高い人であつたとは考へられない。賢いと思つてゐる者が賢いのであれば、其處らに生きてゐる法にも教にもふれてゐない人たちが皆賢いはずです。愚者だと深信する聖人こそ眞の智者であり、悪人だと叫ぶ聖人こそ、眞の善人であらねばなりません。

まことに聖人の無意識界には如來があります。如來の眞實なくしては聖人の叫びの全部がないからであります。身も意も口も、如來によつて支へられ如來によつて生かされてあります。

『念佛行者の三業』

阿彌陀如來の三業と

彼此金剛の信なれば

定聚の信にさだまりぬ。』(和讃)

如來の身、口、意の三業は、衆生の身、口、意の三業となつて表はれて來ます。彼と我との間には薄紙一枚もはさむことがゆるされませぬ。如來の三業が直ちに衆生の三業となりおはります。機法一体であります。彼此金剛の信といふのがそれであり、唯、だから、身には禮拜し、意には命じ、口には稱へて如來をよびさまさうとする型にはまつた時、例の有名な三業歸命の大惑亂がおきたのであります。如來こそ我が價値生活を支へる全部であります。ですからこそ、凡夫であるまゝに五十一段階補處の彌勒菩薩と同じあるとか、正定聚不退の上々人であるとか云はれたのであります。かうした名字こそ高い價値生活の表徴されたものであります。

愚なる老婆

火事がありました。街一面が火事です。一人の金持ちの主人が逃げて來ました。身には唯一個、先祖代々傳はつた家寶を入れた箱を持つてゐます。逃げてゐると河の岸に來ました。河には一隻の舟があつて舟守がゐます。その男は舟で渡してくれと頼みました。すると船頭は渡してはやるが手に持つ全部を棄てよと申します。棄て

なければ渡してくれませんから、思ひきつてその家寶を棄て、舟にのせて貰つて渡りました。

次に一人の老婆が逃げて來ました。彼女は大風呂敷に何でもない着物や道具や家中のものを全部から／＼集めて、脊負つてゐます。山ほどの荷物を負ふて川の岸に來ました。そうして船頭に渡してくれと頼みますと船頭は渡してはやるが持物の全部を棄てよと云ひます。しかし老婆は棄てることが出來ませぬ。『これを棄てたらわしの日暮が出來なくなる。』と云張つてどうしても棄ませぬ。其内に荷物に火がついて焼死にました。持つてゐるものを棄てることが出來ないが故に渡ることが出來ず、持つた荷物に火がついて焼死したとは色々考へさせられる大きな皮肉であります。

先日もさる寺に講演にまいりました時に其寺の方が『この邊の信者は大風呂敷を持つて來て説教を聞いて、一念とはどうだ、指方立相がどうだの、三心一心はどうのと澤山大風呂敷の中にしまひこんで消化しないまゝを高慢の種にして脊負ひこんでゐると申してゐました。

この重い荷物を棄てきららないで、これでまいれる。これでゆかれる。これが安心だこれが信心だ、これがお助けだ、と澤山持つて、これをあしあげにお淨土參りをきめこもうとするのを雜行雜修自力としてきらはれるのであります。多くの同行たちがこのがらくたを不統一に持込んで、老婆のやうに火がついて焼けてもはなさぬ者があります。龍樹菩薩などは初歡喜地を證こたけれど、でも一切を棄て、彌陀他力に期したと云はれます。人間が作つたものであれば、如何に高きうに見えるものでも、くずれます。亡びます。なくなりません。否作つたことそれ自身が生命の停滯であります。棄つべきものを棄てずに河をも渡つてやらふとするのが老婆の慾得根性であります。法にまかして棄てべきものを棄てることを捨機托法といふてあります。愚かな分別を捨てないで、貰はふ、取らふ、儲けやうとする自力根性、欲得根性であります。この根性こそは衆生の根強い我執から出て來ます。この我執が棄たらぬ以上眞實の如來を拜したのではありませぬ。

往相の衆生

宗敎は低い世界にありて高い世界を日暮しさせて貰ふことであります。ほんどうの自

分にかへつてゆくのであります。凡夫であるものが高い聖者のやうに氣取ることは危険なつまづきであつて、誰も彼もこれを繰返しております。高い世界が開けて來た時人は低い世界におりて來ます。如來様が凡夫の全体に印現しきる時、凡夫は凡夫である世界にかへつてゆきます。この凡夫が凡夫にかへつてゆく時、我執はどれて、上からふ、偽はらふ、假面をかぶらふとする心が役立たぬことを知ります。即ちはからひの機を棄て、尊い法さながらに生きてゆくのであります。

この久遠の我執を打破つて凡夫さながらの世界に如來が如來自身を、活現したまふ時、其智慧光は、こゝに我執のどれた、現前衆生を生むのであります。しかも其衆生は最早單なる衆生ではなくて、莊嚴淨土の法藏の因位の願行全体を、正覺成就の果体にこめた全部を廻向された、功德成就の衆生となつてゐます。法藏菩薩の莊嚴淨土の願行は、この衆生をして、自然に、不退に、念佛によつて淨土を創造せしめるのであります。聖人はかうした信仰を自然法爾といふ言葉で御表示になりました。如來の心と衆生の心とが一体になつて如來の智慧と慈悲とが自然に淨土へと往生せしめて下さることとあります。(つづく)

『雜

感』

狂風

一。知ること、愛すること。眞に知ることは愛することでもあります。愛し得ない心の中には、憎む場合と、恐れる場合とがあります。憎む場合にも相手の立場と相手の氣持とを知りつくさない場合が多いのです。心から相手の云ふことを聞いた時には、さまで悪まれない場合が多いやうであります。又怖れるが故に愛し得ない場合は勿論眞に知らぬが故であります。

私たちは時々悪まれます。相手の悪んで言つた言葉が、ちつともこちらの氣持にふれてゐないことを知る時、地上の淋しさを感じます。と同時に私どもが人を悪む場合にも多くは相手を知らずにゐることが多いことであらふと思つて、可なり考へずにはゐられませぬ。

特に他人の噂位を聞きかちつて白いとか黒いとか品定めしたり、良いとか悪いとか批難することは、やがて相手をどんなに苦しめる結果になり、我が身を陥入れることになるかと思つた時、私どもは輕々しく物が云へないことを思ひます。

地上に住岡といふ一個の人間が生きておる。……それが或る人たちには兄のやうに思はれ弟のやうに愛せられ、親のやうに慕はれる。又ある人たちには、毒藥のやうに怖れられる。その怖れられる人たちは大概一度も交際したことがなかつた人であつたり、私のものを讀んでくれず、話を聞いて下さつたことのない人であることが多いのです。私はさまで人を傷つけたり、故意に他人を攻撃したり積極的にはせない人間です。挑戰的に故意に出ることはない人間です。私を知りつくしてくれた人たちが私を愛して下さることを思ふ時、私も可成怖れるよりも知らねばならぬと考へずにはゐられませぬ。

一。如來は衆生を知りつくしてゐなされる。「佛がねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおほせられたることならば。」のお言葉をつかしく思ひます慈悲の根源は知りつくすことであらねばならぬ。知りつくすことはおそらく如來だけに出来ることだらふ。善人も苦しみ悪人も苦しむ、善人だ悪人だと裁くより先に、善の本質、惡の根本を知

つた時、生死勤苦の本を抜くといふ救済が成立つのであります。

一。私が救はれるためには、如來を知らねばならぬ。それは單に冷たく概念化するこゝではなくて、如來をほんとうに知らねばならぬ。如來をほんとうに知るとは、如來の一切を聞くことであります。「問其名号、信心歡喜」どの聖語が意味深く味はれてきます。名號を聞くとは、如來の全部を聞くことであり、如來の全部を眞に聞くことが出来る日、如來を自身と本質を同じうした血潮が如來によつて惠まれる。さうして私自身が名號の主として戴く。聞くといふことはすぐ信ずるといふことである。信するといふことの成立しない『聞』は、眞の意味において聞になつてゐないのです。

一。まごころ。聞く時を與へられることの少い私も、三月末に心から聞かして貰つた源さんに業の思想について、梅原教授に觀經の三心釋について聞かして貰つた。

梅原さんが至誠心の釋の時、善導大師の御思召を語つて、

『天にも地にも、何ものが亡ぶ日が来ても、まごころだけは亡ぼない。お浄土まで持つてゆくことの出来るものは、唯、『まごころ』だけである』と云ひきられた時、私は今更深い感銘をおぼえました。すべてのものがなくなつても、時と處が變つてもまごころだけは亡ぼされぬ。まごころだけが未通る。お浄土へもこのまごころだけが通る。それは善導大師の深い強い叫びであり、釋尊の正意でなければなりません。



一。親慈聖人の信仰は決してこの善導大師の『至は眞なり誠は實なり。』との御云葉を反古にしたり、其正意にそむかれたのではないのです。

至誠心、即ち眞實のみが未通る……。

この第一提言には決して狂ひはない。そのまゝ永遠の眞理であらねばならぬ。『親慈聖人は決してまごころがなくてもいゝとは仰せられなかつた。』
たゞ善導を深め、より私のものへと展開して下さつただけであります。

まごころのみが未通る。……然るに、これがまごころだとゆるされる眞實は愚禿親慈には見出せなかつた。

如來は眞實なり。眞實は如來なり。

如來の一点にのりない眞實が廻向される。如來のまごころが聖人の全体に恵まれた。其まごころが身をも意をも、口を動かした。即ち唯名名によつてのみこの眞實が凡夫のものになるのであります。

多くの同行たちはこの善導大師の正意を忘れて、眞實がなくてもいゝのだと、信仰を悪いことをする口譯け位にしか思つてゐないのです。云葉だけを受取つてほんとうの意味を知らないことは悲しいことであります。



一。まごころに浄土を創造するのも、浄土に往生さす力も、それはこの眞實である佛の顔心のみよくするのであります。私どもは『聖』そのものに斷じて自力のあかをつてはなりません。

光明にそだつ (其四)

問者 栗 島 芳 子
答者 釜 瀬 紫 線

凡 夫

芳子さん、

みなまで言わなくとも私もあなたも相場は決つたものであります。雁が飛べば蛙が飛ぶと言ふ言葉があります。が勢よく空を飛ぶ雁を見て蛙が飛んでもやつぱり蛙は蛙であつて雁になつたのではありません。凡夫芳子や紫線が親鸞聖人の血みどろな求道の話しを聞いて飛び上る程驚いたところが加藤左右門重氏が高野の山に入つた話しを聞いて涙しやうとやつぱり凡夫芳子はやつぱり凡夫芳子であつて變らぬ心の奥の院の御本尊はやつぱり凡夫でしかありません、凡夫芳子がお寢間の中で深い眠りに入つて天に上つて天女になつた夢を見てお寢間の中で躍つても歌つても覺めて見ればやつぱりお寢間の中で不淨な肉体を持つた凡夫芳子であります。

芳子さん、きいて下さい。こう言ふことがあります。或時私はお芝居を見に行きました

その時可成有名な女優が鼠小僧の治郎吉の芝居を打つて居ました。優しかるべき女優が頭にチヨンマケを結び股引をはいてアグラをかいて、俺も男である以上めつたに後へは引かねえぞ……と腕組をして座り込んで居る時聴衆の中の一人が男じやない貴様は女じやねえか……と言ふ聲が聞こへました。まことに舞臺の上では立派な男に見えてもかざりを引破つて見ればやつぱり本質は女であります。芳子さん先月號でも申しました通り宗教の聖壇上では絶對にお芝居が許されませぬ。い、かげんなどころで永い〜闇の概念のお芝居も切り上げにしませぬ。

此頃たくさんのお同行に逢います。聞いて見ますとたいいのお同行はお氣の毒にも廿年も廿年もお浄土參りと言ふ芝居を打たふとして舞臺を組んで努性根をたゝいて見れば地獄必定が悪人が……凡夫が……偽善者がお浄土參りと言ふ善人に化込んで大芝居を打つて居るのであります、お氣の毒と言ふよりはむしろ滑稽であります。

芳子さんあなたもやつぱりお浄土參りと言ふ流轉の旅役者の一人であられませんか
師、時はさこそ〜と思へども

そのばを去ればあとかたもなし

芳子さん芝居でもあまり大きい芝居になると芝居であることを忘れて芝居をやるのです。よく考へて見ると此世はたいがい皆芝居をやつて居るのです。佛様の世界から私達の世界を見たら大きい芝居をやつて居るのです。本質的に見れば同じドングリがよつて集つて博士で御座るの大臣で御座るのと大芝居を打つて居るのです。地上は榮枯盛衰を織り交せた決極苦惱者の群の集つた大悲劇の演せられておる大劇場であります。私達もその中の役者の中の一人でありませんか？……………

大臣と云ふも凡夫、博士も凡夫、男も凡夫、女も凡夫であります。芳子さん聞いても地獄行、聞かんでも地獄行、泣いても笑ふても凡夫芳子はやつぱり地獄行なのです。阿彌陀様も法藏菩薩も願も行も五劫も永劫も信心も安心も決極頭の中でやつて居る一つの概念のお芝居でしかありません。身ぶるいのする様な講演を聞いても如何に眞理のメスを突込まれてズブ／＼にぐり上げられてもやつぱり何ともないより外はありません。何ともないものは相變らず何ともないのです。

相 應

栗島芳子……………それははつきりと凡夫であります。釜瀬紫線……………それはハッキリと凡夫であります。芳子はとも角も釜瀬紫線のみは凡夫であることを何の躊躇もなく告白致します。芳子さん相應と言ふことがあります。柳に燕、池に船、船に帆柱、帆柱に旗と小學校時代に習いました。鬼に金棒、竹に虎……………

みんな相應したものの、一つであります。金魚は魚である以上水の中に居るのが當然であります。人間は土の上から一足も離るゝことの出来得ないものと相場は決つて居ます。しかるにその大地を一步も離るゝことの出来得ない人間が天空を自由に飛び歩いて居るとしたらどうだらう。……………

それは飛行機と云ふもの、力であることが知れませふ。人間自身の力ではなくつて飛行機それ自身の力が人間を乗せて天空を飛んで居るのであります。

一つの生ける事實

芳子さん今この原稿を書いて居る横に廿六七才になる一人の女性か子供をおんぶして座つています。こゝから二量餘りの道を今朝暗い中から參つて来た云ふのです。よく聞いて見ると去年の六月吉田町で講演を聞いた時あまりにも淺聞しい自分の姿を知らされ醒めざる自分が今永劫の如來の血に依つ醒めざる姿を知らされたうれしさ有難さにじつとして居ることが出来ないである日嫁づいて居る内をそつとぬけいで子供を脊おうたまゝ、十里あまりの道を歩いて光明團の本部にゆき一口……だの一口お有難うございました。御恩知らずで御座いましたと一口言いたればつかりに出てきたと云ふのです私が旅から歸つて見た時あなた不在中に高田郡から女の方がお禮に來たと云つて來られお花とやさいを置いて佛様を拜んでかえられましたと聞きました二階に上つて見ると美しく……彼女心から十里の道を持つて來てくれたお花が一輪さしに入れてありましたのを見た時私は泣かづには居られませんでした。その彼女が今こゝに來てお話を聞いて居ます。芳子さん何十里の道を遠しとせずたゞ一

口の御縁が頂きたいために求道する人達を見る時五濁惡世の地上に住む凡夫としてはあまりに美しい事實ではありませんか。

本願力

力が加わらねば動かぬ。……………

これは宇宙の眞理であります。力のないものが動いたと言ふことは未だ聞いたことがありません、死人が歩いたと聞いたことがありません。然り！ 芳子さんあなたも私も生死海中に流れてゐる逆放の死骸である。千年打つてもたゝいても醒めざる凡夫であります。

芳子さんもう一度くり返します。魚は水の中に居るのが當然であります。鳥に非らざる以上絶對に大空に飛べないはずであります。しかるに飛ぶべからざる人間が大空を飛んで居るところそこに飛び得ざる人間を飛び得る飛行機が乗せて大空を飛んで居ることです。そうです芳子さんあなたも私も凡夫である以上後生ども如來ども淨土とも考へてはならないはずの凡夫芳子が。……………

あ、終に時が来たのだ、久遠劫よりの如來様の涙が終に今日は後生とも淨土とも思
わなつた私達を横だきにして醒めざる私達を一口の説法をも聞き得るまでに佛法聽聞
の席上の大空まで乗せて運んで下さつたのです。

光明團本部印刷部主任

花 山 健 二

今度印刷部の主任とし、本部員の一人として入れ
て戴きました。本氣で働いて御氣に召すやうな印
刷を法兄弟の机上に送りたいと存じます。以後よ
ろしく御指導を、先は御挨拶まで

合

掌

おのれに出でたるものは、おのれにかへる。それは全宇宙を支配する鐵則で
あつた。この鐵則の前に頭をさげた時、人は不思議にも心のひろさを感じる。
人は皆救われねばならぬ。

救われる前にこの因果の大法則の前に頭をさげねばならぬ。
無言のまゝ合掌せる姿……………

それは決して高ぶつたものゝ姿ではない。『おれが、わしが』のくづれた人
である。地におりた人である。

私は今涙にうるむ心で、念佛しつゝ、この鐵則の前にひれ伏している。
こうした後がどうなるのかそれは私にはわからぬ……………

轉法輪の旅

釜淵紫線

三月六日晚より十二日晚まで

宇和島市北町立正寺——

本部の例會を濟ませて光明の原稿を整理して五日午后八時相生丸に乗つて先生と二人は一路宇和島へ、船は乳色水色の單調な色どりの空の下をゆく、船中に團員二木田綾子、濱中みさは様二人を見る旅の道づれうれしく、船は夕暮れせまる高濱に着いた。紅い信號燈のとぼつた高濱に。二木田さん達を松山に送つて窪田旅館に入る。此頃の主管は重い精神的試練を受けて居られる。私も主管も黙つて小波の音をき、つゝ床に入る。名も知らぬ汽船が太い汽笛を上げて出ていつた朝八時宇和島丸にて宇和島へ、空は紺碧に晴れて乳色に霞む四國連峰を横にみつめつゝ静に——船は進む近頃ない物

後ウスギに向ふウスギ驛より列車にて別府へ……………

久しぶりにくつろいで温泉にひたる。一泊して途中小倉なる河野よしの様の宅久しかぶりに御見舞かたゞ訪問打くつろいで一夜の宿を頂き下關へ……………

十六、十七、十八日三日間下關佛敎婦人會館。此度で第二回の因縁である。

驛につけが山田とみ子様、吉岡すね様吉岡久子様等の迎へを得て會館に入る。會館の生れた意見が私達と同じ意見なので心から落つける。みんなが懐かしい。涙がこぼれる程なつかしい、こんな自由な魂で結ばれたは團體がどこにもほしいと思つた。

十八日の夜講演後直ちに夜行でザヨーナラ。お同行は列車まで送つて名残りを惜しむ……………驛前の廣告燈は淋しう明滅し

思わしい旅である。

七日夕宇和島着立正寺奥様院主様其他の迎へを受けて立正寺に入る。朝夜三席の大獅々吼、當地は佛敎方面としてはあまり青年處女に對して新運動のされてない土地の様に思われた。特に努力を要する土地と思ひました。

九日、十日、十一日の三日間を私は一人で北宇和郡蔭淵村綿江寺にゆく、佛敎講演等あまりなき地にもかゝわらず聴衆多かりし。

共に青年男女の共鳴を得て十四日朝ザヨーナラ、立正寺奥様は本縣世羅郡の人にて本團の爲に常に努力下さいます。立正寺佐々木惠亮師、全秀亮師共に敎界には珍らしきなつかしき人なり。

前日の風雨くまなく晴れて波靜かにカモメは上空に謳ふ平和なる海路を船は豊

居た。

二十日日中より福山市外市村支部發會式

團員羽原守雄君の盡力により羽原收入役を支部長として發會、晝夜聽衆堂に満ち盛大を極む、將來有望の地なり。

二十三日より三日間行森支部講演

團員森本繁市法兄の追悼法會である。すべて涙ぐまし、去る十一月東京驛頭に團歌を高唱して別れし兄を今や白骨としてまみゆ……………

墓前に合掌讀經しつゝ、感慨深し、しづ心なく梅花色あせて散るも淋し。

二十五日より三日間高田郡丹比村谷川仁一様方、みんな待つて居て下さつた主管は始めて私は三度目なじみが深い。谷川夫妻共に熱心なる求道家である。近家行政家は近時新聞紙上をにぎわしめた

る二巡查殺しに遭難された氣の毒なる宅である。主管と共に御見舞申し讀經させて頂き、如何に人間の持つ貪欲の恐ろしきかを考へさせられた。

教善寺及び日蓮宗大徳寺住職共に熱心なる求道家である。二十八日名殘惜しくサヨナラ、廿八日より三日間廣島眞宗學研究會講座聽講、一日より本部大會、毎晩の様に本部員の野外廣告傳道等破裂せん前の火山の如く心躍らしつゝ來る大會を待つ。

編輯室

□いかなる寂しい、ものも魂の躍りを覺ゆる春でふります。机の上のヒヤシンスも櫻草も小さい生命の限りをつくして生きようと努力して居ます。宗教がなくつてもすむような氣のするものも此頃です。『衆生花に酔へば我濟

度にさめん』とは句佛師の言葉であります。本部では皆それ／＼仕事に急いでゐます。

□本團印刷部の開始。本年一月からあれこれ心配してゐました印刷部いよいよ出来上りました。まだ活字の整理中ですが、兎に角四月號から本部の印刷部ですつたものが皆様の御手に入ります。

資本とてはない本部ですので、これも全く團員の方々の御盡力がら生れたのです。おい／＼整理がつけば皆様の御手に色々なパンフレットもお届けする事が出来ます。

□花岡先生は山縣に、釜瀬先生は高田に齊原先生と松浦さんは安佐郡に住岡主管におつきしてそれ／＼活動に出かけました。

愛 慾

愛慾の意を田となし姪怒癡を種となす
愛慾の人はなほ炬を執りて風に逆ひ行くが如し必ず手を焼くの患あり
人愛慾に貪著し非法の行に習ひ死命の至るを觀ずして長久生くべしと思ふ
泥に投じて自ら溺る故に凡夫と云ふ

本誌	一冊 金拾 錢
定價	一ヶ年 金壹圓貳拾錢 (郵税共)
昭和二年四月十日印刷	
昭和二年四月十五日發行	
編輯兼發行人	花岡 靜人
印刷所	光明團印刷部
發行所	廣島市八丁堀二十六番地 光明團本部 振替貯金口座 下關貳叁〇八番